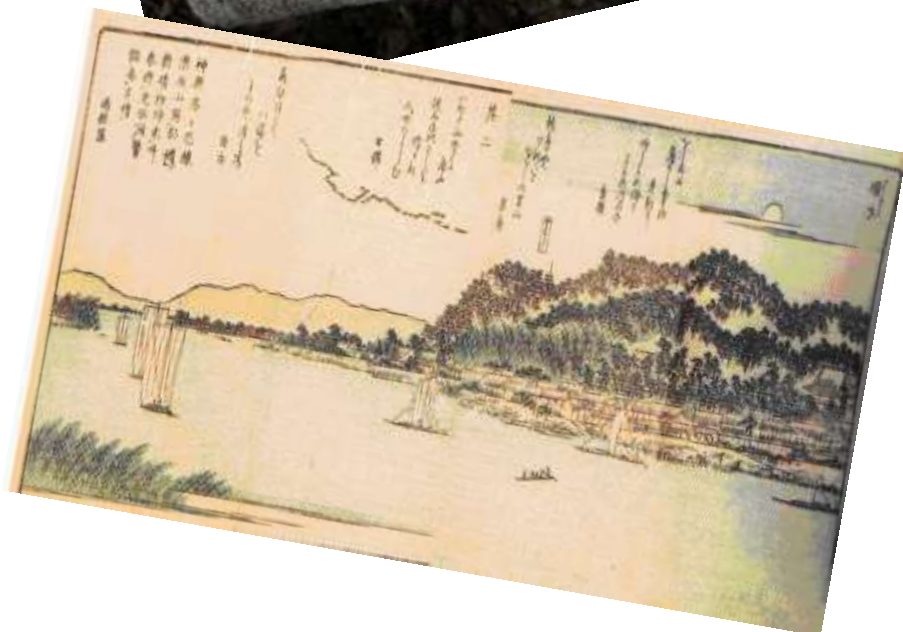


「市民が元気なまちに！」

VOL.3～新生八幡へ脱構築



●はじめに

今、私たちは時代の一大転換期の渦中にある。つまり、明治維新（維新革命）、第二次大戦の敗北（戦後復興）、東北大震災（大地震・大津波・原発事故）の3大価値の転換期にある。先の震災直後には無常観が支配し、これまでの成長のあり方や「安全神話」、人生観が根底から問い直されることとなった。表紙の「吾唯知足」はそれを象徴しているかのようだ。

こんななかで、「脱官僚」、「コンクリートから人へ」「大規模開発より福祉・教育」「国民の生活第一」を掲げた民主政権は、自ら示したマニフェストをかなぐり捨て、野田首相に至っては約束もしていない消費税まで「政治生命を賭して」強引に成立させてしまった。

結局、国民の期待をことごとく裏切り、政権は「死に体」のまま浮遊している。いわゆる「苦勞知らずの若き政治エリート」集団の政権運営や政治手法の稚拙さが一気に露呈した結果といっている。

さて、このようななかにあっても、地方自治体は中央政府と心中するわけにはいかないのだ。寝ても覚めても市民と向き合い、市民の目にさらされている自治体にとっては、“いま”はもちろん“次世代”に通じる確かなまちづくりを示していくこと“待ったなし”だ。

私は、このような立場に立って、現在と将来の八幡市にとって、最低限必要と思われる次の3つの戦略的課題について、検討することにした。



- (1) 世界遺産登録運動で新生八幡転換
- (2) 「市民が元気なまちに！」～地域再生でまちの資産倍増
- (3) 市民協働推進型行政への転換～時代先取り行政へ

2012年10月八幡市議会議員 上谷耕造

(1) 世界遺産登録で新生八幡へ転換

「もったいない」「もったいない」 八幡のまちには立派な「お宝」が埋もれたまま放置されているが、実にもったいない限りである。

そこで、まずは、自らが足元で宝探しをし、実際に日々生活している地域を見つめなおす。地元の「お宝」を再発見・再確認するなかで、これを全国に誇れる新しいまちおこし（ふるさとづくり）の起爆剤にしていこう、というのがここでの狙いです。

当面、早急に取り組む必要があるのは、本市にとってシンボリックな史跡などで、石清水八幡宮をはじめ次の3点に絞り込むことにする。



八幡まちかど博物館

飛行神社やジャズ喫茶など旧東高野街道沿線の7つの異業種が集まってこのほど「八幡まちかど博物館」を立ち上げた。八幡では初の試みで、今後の展開が注目されている(写真は、自転車工具や部品類などをテーマに展示した八幡・城ノ内の高井さんの博物館)

- 1) 石清水八幡宮～文句なしの全国区級のテーマ。早急に世界遺産登録運動へ
- 2) 史跡松花堂～石清水ゆかり史跡。書、茶、茶器、絵画、食…文化サロンとしての広がりの可能性あり。
- 3) 1) 2) をつなぐ旧東高野街道とその沿線の街並みなどの風致や景観

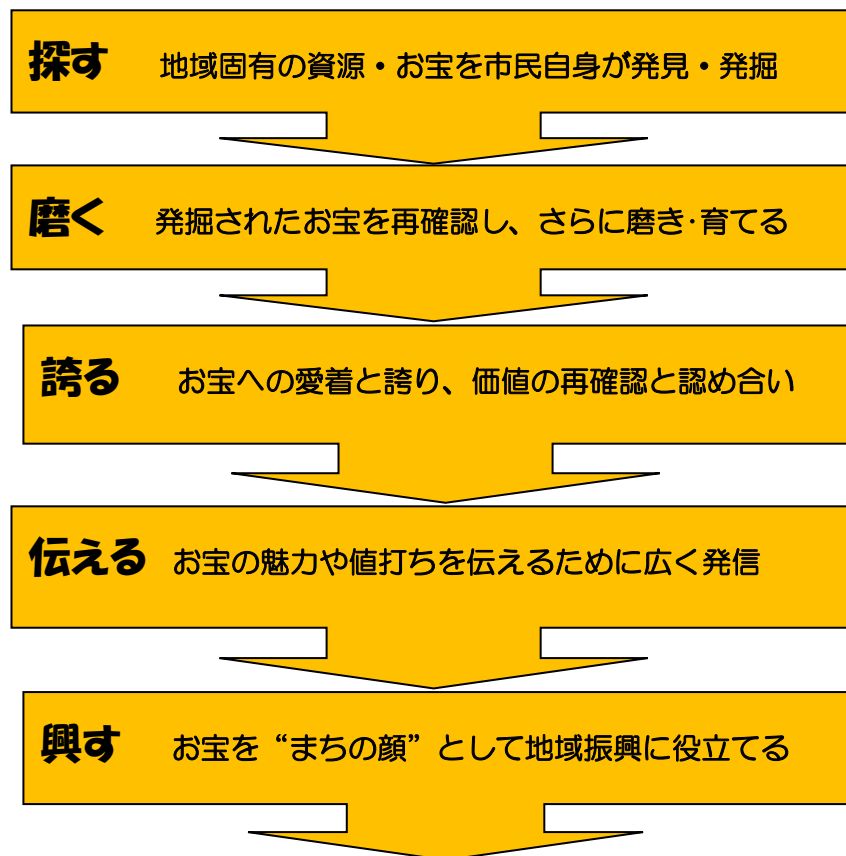
私はこの間、八幡市にとって最もふさわしいまちづくり（新しいふるさとづくり）の手法は、「エコ・ミュージアム」という考え方であり、政策手法であると確信をもって提唱してきた。エコ・ミュージアム。それは、ECOLOGY（生態学）とMUSEUM（博物館）を合わせて作った造語で、「青空環境博

物館」などと訳されている。フランスで生まれた考えで、エコ・ミュゼ、ワールドミュージアムなどと呼ばれる場合もあり、その八幡版を「八幡まるごとミュージアム」と呼んでいる。

わが国では、山形県朝日町がまち全体として取り組んだ第1号で、いまでは多くのまちが採用するようになりました。最近見られる大阪・平野区や郡上八幡、八幡市の旧東高野街道沿線における「まちかど博物館」という取り組みも、民間の自主的な魅力ある試みといえます。

<参考～八幡まるごとミュージアムとは？>

● “宝探し” から “地域づくり” へ



●ではなぜ、いま八幡まるごとミュージアムなのか

①地域に目を向け、地域から日本を見つめなおす。

地元学の奨励

②大規模開発に頼らず、現存する資源をあるがままの状態
でまちづくりに生かす。開発にも展示収納にも大きな資金が
かからない。大きな資源がなくても取組みが可能

③市民と行政のパートナーシップー市民協働の取り組み手
法が必須条件である

④自主研修・相互研修などを通じて、市民としての不断の
自己研鑽と自己確認ができる

⑤自然との共生によるエコの事業の推進ほか

※今の八幡市の場合、とくに②③のテーマが重要で、今
後のまちづくりのテーマとすべき考え方です。

※<注>なお、本書は市内の名所旧跡を紹介するのが本意では
ないので、詳しい内容が知りたい人は「古からの贈り物東高野街道
歴史ロマン」(街・歴史散策研究会)「古から未来へ 歴史ロマン探
しの旅日記」(同)その他をご参照ください。

<●参考ーまるごとミュージアムの8つの特徴>

まるごとミュージアムは、次の8つの特徴(基本的な考え方)があります。

(1)住民と行政のパートナーシップー市民協働・市民参画が運営の前提条件。

(2)自らを映し出す鏡ー展示や活動のなかに自己を映し出し、自分自身のア
イデンティティを創造していく場であり、来訪者に共感を与えるもの。

(3)人間と自然の表現ー共生の考えにもとづき、地域特性を活かした地域ア
イデンティティを創っていかうとするもの。

(4)時間の表現ー地域で培われてきた人々の体験と遺されてきた記憶を、世
代を超えて共有し未来を展望していかうとする時間の博物館。

(5)空間の解釈ー行政区などの境界とは関係なく、一定の文化圏を領域とす
る空間を有機的につなげ、再構築していかうとする空間の博物館。

(6)地域発展のための研究所ー様々な学問を横につなげ、研究成果が地域の
振興・発展に役立つ研究所。

(7)地域を知り、担い手を育む学校ー自分たちの生活や環境を豊かにするた
めに学び、人材を育て、地域に根差した生産成果を上げるための学校。

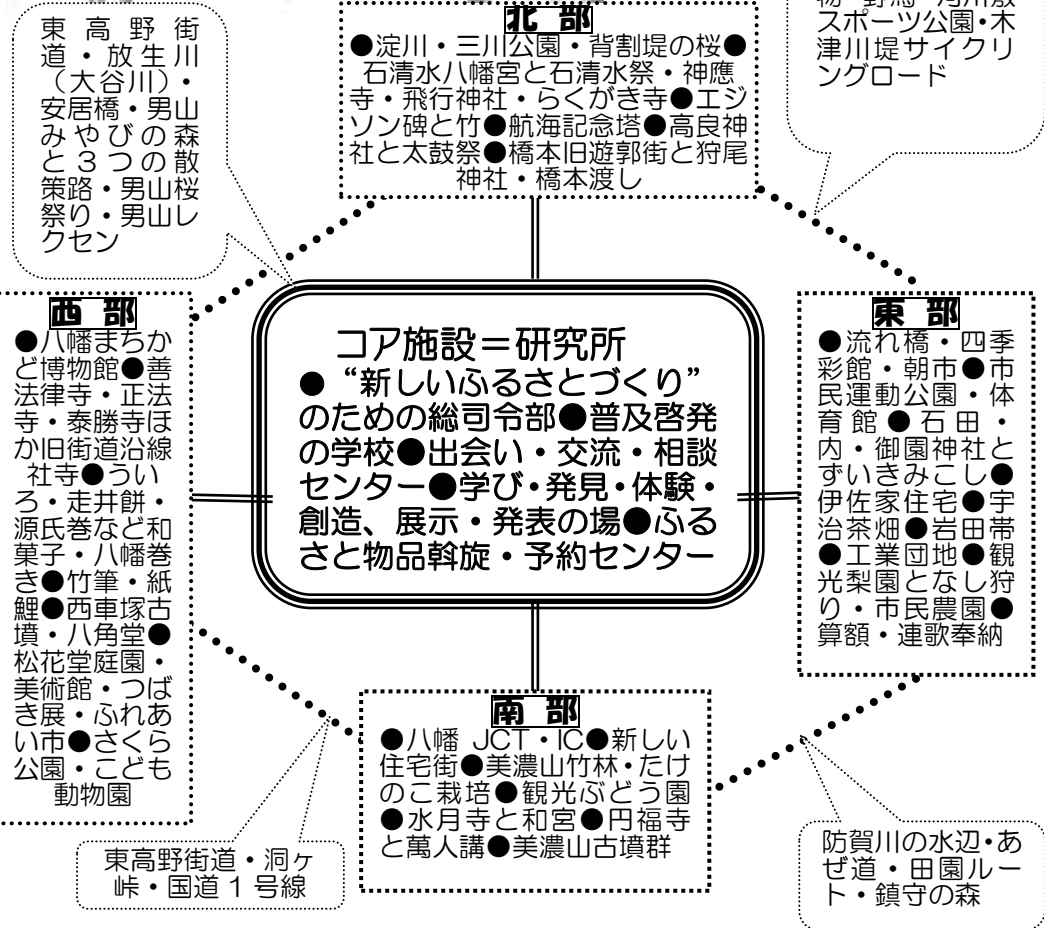
(8)地域の文化遺産や自然資産などの保存機関ーものだけでなく生活や文
化、記憶など地域の魅力があるがままに保存し、育てその価値を広く伝えて
いくための保護育成センター。

市民協働の力で世界遺産登録運動の推進を！

▼市内のおもな地域資源



左＝国宝指定が待たれる石清水本



1) 石清水八幡宮

これまで、市は石清水八幡宮をまちづくりやまちおこしの対象として位置づけたり、市政推進のために積極的に働きかけたことはなかったように思う。いわゆる故事来歴や遺産の紹介、案内、つまり文化財保護や管理にとどまってきたのではないか。八幡市のまちづくりにとって、石清水八幡宮を抜きには全くありえないばかりか、その動向に左右される形で、市は没主体的にかかわってきたように思える。このことは私自身も十二分に承知していたが、これまでこうした発想には至らなかった。今後こうした市の姿勢を改め、積極的な見直しを図っていかねばならないと考える。このテーマは、本市にとって政教分離以前の重要なテーマだと思うからだ。

本市と石清水八幡宮の関係は、八幡宮の浮沈がそのまま市の浮沈につながるという関係にある。景気の動向や生活スタイル、趣向、価値観の変化や多様化などにもよるが、それにしても、この間の石清水八幡宮の凋落ぶりは目を覆うばかりだ。神社の歴史遺産としての「値打ち」とは別に、知名度は意外と低くいわんや全国区には及んでいない。例えば観光客数。石清水の年間訪問者数は約 100 万人で、平成 17 年が 140 万人であるのに対し 21 年では 115 万人と下降線をたどっている。その潜在能力からして 5 分の 1 程度にすぎず、ほとんど発信力は機能していないのではないか。

市民協働の力で、石清水八幡宮一帯の世界遺産登録運動の推進を！

市は早急に主体的対策を講じるよう取組みを強める必要がある。石清水に関連するキーワードはおおよ次の通りです。

*男山文化圏～男山・石清水八幡宮は、かつて、石清水八幡宮を中心とした「男山文化圏」とでもいえる広大な文化圏を擁し、影響力を誇っていたことが分かってきた、との調査報告が最近発表されている。

*境内などの史跡指定から本殿の国宝指定へ

2012年今年に入って石清水境内（48坊）や摂末社が待望の国の史跡指定を受けた。この史跡指定は、石清水本殿の国宝指定には欠かせない要件で、これを機に本殿の国宝指定へと向かわなければならない。

*世界遺産登録～次の段階として着手する必要があるのは、世界遺産登録運動である。そのためには当面、文化庁の国内登録リストに登載されるよう働きかけをしなければならない。

*では、なぜ世界遺産登録運動か？ それは実現可能か？ そのメリットは？

簡単にいうと、世界遺産登録運動は、この運動によって石清水八幡宮が文字通り全国的に知られ、八幡市も全国区となる。加えて、当然にも市民協働の運動となるので、この運動を通じて市民のアイデンティティを高め

めふるさと八幡に対して愛着を持つようになること。特にねらい目は後者にある(平泉市などは良先例)。

ここで大事なことは「市民協働」だ。つまり、一部専門家による取り組みに終わらせることなく、市はもちろんのこと観光協会や商

工会、社会教育、学校教育など市民各界各層による全市民的な「見える化」運動としなければあまり意味を持たない。

いま中心となって頑張っている市民活動のリーダーたちがその気にさえなれば、これは十分実現可能である。

毎年9月15日に催される「闇夜の奇祭」・石清水祭



世界遺産登録～今その体制はあるか？ なければ準備できるか？

*北の比叡山、南の石清水

御所（皇室）を守る表鬼門にあたるのが世界遺産の比叡山延暦寺であるのに対し、石清水八幡宮は裏鬼門にあたる。比叡山が世界遺産であるのに男山—石清水八幡宮はそうはなっていない。

この不自然さを今からでも解消する道を早急に探る必要がある。

本来は、第1次の登録段階で、先の比叡山や下賀茂神社、宇治平等院などととも、古都の神社仏閣や遺跡史跡群のひとつとして今ある京都の世界遺産のなかに組み込まれていなければならない存在。

推進主体の側に十分な準備ができていなかった（その力量がなかった）ことによるものと思われる。何と云っても申請するのは行政主体である八幡市だ。

申請主体は行政である八幡市だ

石清水八幡宮はいわゆる“日本の思想”の宝庫であり、今後の世界戦略に対する積極的外交の思想を内包している。その主なキーワードは次の通りです。

*八幡信仰と「神仏習合」思想の総本山

独特の日本文化を生み出した源泉。「みんな違って みんないい」「和をもって貴しと為す」→こうした多神教あるいは日本的宗教の考え方は、日本という国の成り立ち（国生み）から行く末まで考えることのできる価値のあるテーマ（これについては、別途もう少し詳しい説明が必要）。

八幡信仰は男山遷座とともに全国化。三大八幡宮とまちの連携推進

*「男山の雅の森」「鎮守の森」

～キリスト教的自然観と仏教・神道的自然観

わが国の仏教や神道で言われている自然観は、「木や岩など自然の万物のすべてに神が宿る」というシャーマニズム（自然崇拜）の思想を

ベースにしているのが、長年にわたって緑や森の保全に寄与してきた。

「山川国土悉皆成仏」、エコロジー、「自然との共生文化」など。あるがままの自然はテンネン、またはジネンとして大事にされてきた。

なお、「男山の雅の森」は、京都府の歴史的な自然保護区域の第1号に選ばれている。

一方、西洋キリスト教文明は、「全ての創造主は神である」といういわゆる一神教的思想。また、その後登場した、フランスの思想家デカルトは「われ思う、ゆえにわれあり」と主張。人間の理性に勝るものなしと人間中心主義＝人類こそ霊長類の頂点と思ひ込み「共生思想」を排除。西欧科学技術万能主義の思想を生み出した。白黒発想、二項対立の発想につながり、東洋の“灰色”発想はない。

以降、この思想は産業革命の動力となったし、今なお飽くなき「成長神話」として世界を支配している思想である。また、東洋のジネンとは違って、エコロジーというと人間が介在した人工的自然という意味合いが強いように思う。原発も人間のコントロールで安全に支配できるとする神話の理論的源泉もここらあたりにある。

＊中世アジールの境内都市（＝解放区）

近世まで、国家権力によって特別に庇護された境内都市（＝解放区、聖域）。ギリシャ語の「侵すことのできない神聖な場所」からきた用語。教会や神社仏閣、市場に多い。

普通、権力がその地域に影響をおよぼしていく場合、浸透しやすいところから徐々に広がっていく。ところが、どうしても最後まで浸透できず、最後まで残った場所がアジールとなった。

八幡市の場合、八幡宮の庇護のもとに近世に至るまで中世的世界が支配した。これは今も、八幡市民の意識や行動様式、地域性を基層部分で規定しているキーワードとなっているものと思われる。

＊門前町としての展開～善法律寺、新善法律寺、正法寺ほか

＊歴史的河川としての放生川～殺生戒、宇佐八幡宮以来の伝統を継続。

＊石清水祭と神人制度～旧3大勅祭のひとつ。もともと石清水放生会とよばれ、男山のすそ野を流れる放生川に、八幡大神が生ける魚鳥類を放ち、霊を慰める祭儀。863年【貞観5年】清和天皇時代に始められた。祭儀は

真夜中に行われることから、真夜中の奇祭ともいわれる。神人はその世話をしたり、祭りの行列に参加する人たちで、石清水祭特有の制度ともいわれている。

＊エジソンのあかり～電球と竹のフィラメント→西洋近代科学技術文明の夜明けを象徴する出来事が、神仏習合・東洋思想の象徴としての多文化共生思想のシンボル・男山で実現したことの皮肉というか、面白さもある。東西思想の融合で“八幡・男山の竹”は、竹のブランドとなっている。

世界遺産登録には普遍的なコンセプトが不可欠。石清水の場合、「神仏習合」と「緑の文化」は最適で、それは将来(次世代)と世界文化に貢献できる壮大なテーマである

<具体的課題>

① “まちのお宝” 基礎データバンクづくり

本来、そのまちに行けば、そのまちの姿や歴史が一目でわかる郷土史料館的な施設があるが、残念ながら本市にはない。

ただ、これをこれからつくりあげていくとなると、財政的にもかなりの負担となる。

そこで、考えられるのがパソコン上のバーチャルミュージアムだ。当面、そのためのお宝データバンクを蓄積することが大事だ。Webを活用したデータバンク→HPによる展開、「東高野街道散策ガイド」の発行ほかウェブミュージアム(バーチャル博物館)をパソコン上で立ち上げる。

② 石清水八幡宮の再生基本構想の策定

③ 48坊と撰末社の調査・復元

石清水社の48坊と撰末社の存在は、この間の史跡指定のための境内調査で一部、徐々にではあるが明らかになってきた。さらなる調査究明の進展は、市民にとって夢とロマンを掻き立て、まちへの愛着を深める方向へと立ち向かわせるだろう。

- * 松花堂茶室跡
- * 護国寺跡～八幡宮本殿に次いでつくられた仏堂。石清水八幡宮を取り仕切った司令部。真言宗の仏僧・行教が建立。
- * 大塔跡
- * 宝塔院跡
- * 八角堂跡

2) 史跡松花堂

史跡松花堂のあり方が今日ほど話題になることはなかった。旧東小廃校に伴う「ふるさと学習館」の移転問題を機に急浮上することとなった。

旧東小学校廃校に伴う「ふるさと学習館」による施策の展開は次の通り。

<これまでの市教委の見解>

旧東小学校（A）の廃校に伴い、ふるさと学習館（B）を次のように移転する。

松花堂（C）奥にかつてあった「歴史民俗資料館」（D）を改修して復活させ、ふるさと学習館に貯蔵されている美術工芸品や古文書類など直ちに展示できるものは（D）に移し、展示できない遺跡類などについては（B）に移し保管する。

（D）＝歴史民俗資料館の復活で、松花堂は、史跡の庭園、歴史民俗資料館、美術館を擁する八幡市の文化の殿堂となる。その際学芸員らはここで集中連携して仕事に当たる。

史跡松花堂に毎年訪れる客は、団体客を含めて平成 18 年が 57 千人、21 年には 35 千人まで落ち込んだ。1 日単位にすれば約 100 人、観光バス 2 台分だ。市内 で 1, 2 を争う観光施設がこの様では誠に恥ずかしい限りと言わざるを得ない。毎年税金を投入してこのような成果しか挙げられていないのは何とものもったいない限りだ。市民としても、このまま看過しておくわけにはいかず、なぜこうなったか徹底的にメスを入れ、早急に原因を突き止め、立て直しを図らねばならない。

松花堂の場合、石清水八幡宮とは全く異なり、市の指定管理者〇〇事業として実施しており、市の手の届く範囲にある。この際、市は松花堂を歴史・

文化事業の拠点として再生するための基本方向を指し示すべきだろう。

現状にメスを入れ、いかに再生させるか。

市は早急に、松花堂の「活性化基本構想」づくりを！

<具体的課題>

- ① 今後の松花堂の取り扱いに関する先に見た市教委見解は、今トーンが下がっているように思うが、実際はどうか。
まず、文化財保護の古文書担当が退職するなど人材不足となったが、どうか。
- ② 現状にメスを入れ、いかに再生させるか。松花堂再生基本構想の策定
- ③ 美術館の現状をどのようにとらえ、今後どう生かしていくのか。
- ④ 美術館に限らず、ほかの個々の施設の機能がどのように生かされ活用されているか、の検証。
- ⑤ まちづくりの担い手と市民団体の育成による協働事業の推進
* 松花堂の普及啓発と資金確保に後援会や「友の会」の組織化
* 観光ボランティア、ものしり博士→市民学芸員（フィールドワーク、実地研修も）→市民参加のイベント、企画運営

※現行の催しは、教養主義というか一般受けしない専門的な展示が多いように見受けられる。書、茶、食、絵など切り口は多岐にわたっている。全国を対象にした松花堂弁当大会、書道甲子園などが考えられるかどうか。

* 市民研究者らとの連携と育成～「昭乗研究所」「歴史探究会」「古文書を読む会」「街・歴史散策会」ほか

- ⑥ 八幡まるごとミュージアムのまちづくり推進基本構想の策定
→以上の力を総合して基本構想づくりを進める

⑦ 文化財保護課の拡充

現在、文化財保護係、市史係の2係があるが、後者の方はほとんど機能していない。

いま、市の文化財保護にとって大事なことは、市史刊行から30年近い月日が経過していることだ。

* 現行市史の問題点は、まず資料編が発行されていないこと。市史は本来、資料を収集し、それに基づいて順次著述していくのが普通のやり方。

いまのままだと、極論すれば、史料の裏付けのないただの著述(物語)に過ぎず、歴史的価値に欠けるものとなる。

* しかも、当時収集した資料類は、持ち主に返したり散逸したりして手元に残っていないものも多い。今さらどの程度まで再収集できるのか、ほとんど難しいと思われる。しかし、避けて通るわけにはいかないテーマで、このまま放置しておけばますます困難になる。早急に、再収集に着手すべきだ。

* 市史発行から30年が経過し、その後、数多くの発掘作業などで新しい事実や発見があり、これらを記録しておく必要があること。

図 1-⑩



図 1-⑩

鳩茶屋下の崖

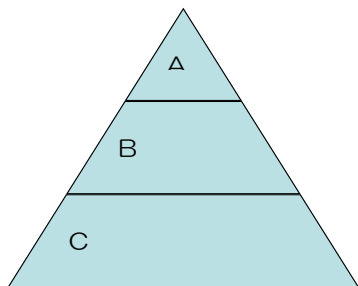


馬場グランド

●今年8月、府南部を襲った集中豪雨で大きな被害にあった男山。気になることは、竹林で覆われた箇所に被害が集中しているのでは、ということだ。仮にそうだとしたら、その植生上十分に予想できたことで、これまでの緑の保全策のあり方が問われるとともに、今後の対策が急がれる！⇒府歴史的自然環境保護区、市の対応

3) 歴史まちづくり法によるまちづくり

石清水八幡宮本殿の国宝指定の取り組み



●ピラミッド図の説明

最上層(A)＝石清水八幡宮本殿。現在、国の重要文化財。当面の課題は、この本殿を国宝指定にすること。今春、Bの層(＝摂末社や境内の48坊跡などの遺跡群)が重文指定となり、条件は整った。加えて、Cの層(＝周辺の男山の森や竹林・散策路、男山に連なる街道や川、橋、街並みなどの風致や景観)の整備が必要⇒歴史まちづくり法によるまちづくりが何よりも急がれている。



▲川が溢れると流され、水が引くと元に戻る柔構造で長さ日本一の木橋、木津川流れ橋。台風一過で水嵩が増える。時代劇用ロケでも有名。

世界遺産登録を目指す石清水八幡宮と史跡松花堂を南北に結ぶ旧東高野街道とその沿線は（門前町としての広がり）、八幡市独特の歴史的景観や風致が感じられ、これを活かしたまちづくりを目指すにふさわしい情景にある。

しかも、この良好な景観は所有者の高齢化や世代交代、生活スタイルの変化などで、建売や賃貸住宅、ガレージ、空き家にとって代わり、歯抜け状態となっている。そんななかで、崩壊変化する地域にブレーキをかけ、より積極的に保存しようとするのがこのたびの歴史まちづくり法だ。

歴史まちづくり法（＝地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律）は、まちづくり行政と文化財保護行政の連携で歴史的風致を後世に継承するまちづくりを進めるために国（文科省文化庁・農水省・国交省）が共管してできた法律。これまでの法律の限界を超えて作られたものとされている。

これまでの関係する法律

ア) 古都保存法

保存対象が京都、奈良、鎌倉など古都の周辺における自然的環境に限定されている。

イ) 文化財保護法

文化財そのものの保存活用を目的としたもので、その周辺環境の整備などとは無関係であること。

ウ) 景観法・都市計画法

いずれも規制措置が中心。歴史的建造物の復元など歴史的資産を活用したまちづくりへの支援がない。

工) 歴史まちづくり法の研究

「竹林は地震・災害に強い」は本当か？
問われる男山の緑の保全策

＜具体的課題＞

- ① 淀川・三川～国営公園の早期実現／ドラマティックフィールド（七夕、河川祭り）推進⇒“川・河”をテーマにした現代アート（カウンターカルチャー）を活用すべき（たとえば、淀川国際芸術祭～現状では、やる気があるのかないのかわからないアリバイ的な取り組みに終始している）
- ② 放生川・安居橋～このゾーンは石清水門前町・旧東高野街道の一角で、単なる河川ではなく**歴史的河川**であることを明記することが大切。
浄化と親水化・流水化→「蛭が飛ぶ川」の復活→4市総で言うとおりの「環境自治体宣言のまち」のシンボルゾーンとして整備したい。
長年実施してきた美化ボランティアや「さざ波フェスタ」などの催しをどう評価し、活かしていくか。
- ③ 神社仏閣の公開（部分⇒全面）
- ④ 市駅～松花堂までの東高野街道と沿線を歴史的まちづくり法にもとづく「歴史的まちづくり・道づくり・街並み保存事業」として推進（⇒詳細は「古からの贈り物 東高野街道歴史ロマン」街・歴史散策研究会参照）
- ⑤ **歴史道と未来の道交差点**～樟葉～男山中央センター～松花堂を「未来街道」軸と設定。市駅～松花堂までの旧高野街道を「歴史街道」軸と設定。双方が交わるのが松花堂前の交差点(旧 GS 前)→名称や使い方を含めて再考すべきだ。
歴史街道軸は市の歴史文化戦略を推進する南北軸で、未来街道軸は市の新産業・成長戦略を模索し展開する基軸。歴史と未来が交わる双方の交差点をどう位置づけ、活用するか。今後、もうひと工夫あって然るべきではないか。



▲旧八幡市民にとって、年間最大のメインイベント高良神社の太鼓祭り

⑥沿線の商店・空き家対策

⑦男山「エジソンの竹」と「みやびの森」の共生
市のシンボルとしての男山のみどりの再生～「みやびの森」「エジソンの竹」はいま、

放置侵入竹林で危機に瀕している。エジソンが使ったフィラメントは男山の真竹

であるが、それがその竹でさえ、外来種の孟宗竹に追いやられて影が薄くなってきている。

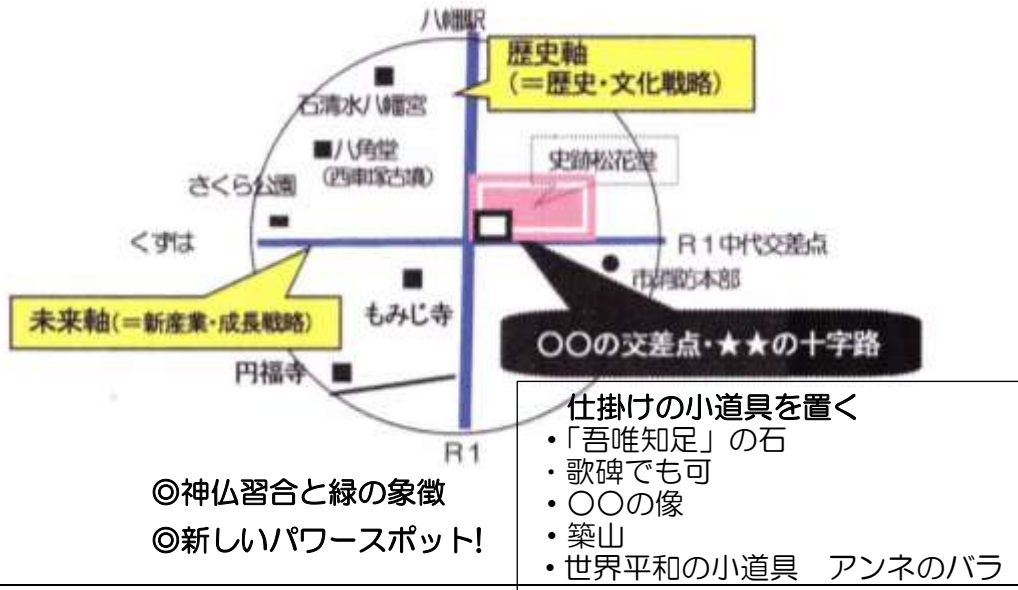
(竹林と樹木林の共生→太古の森・みどりの保全、CO₂削減、地すべり防止)

⑧ 3つの男山散策路整備～男山の散策路整備とメンテの充実。

「こもれび」「せせらぎ」「ひだまり」の3ルート of メンテ充実、案内サインやトイレ設置、新ルートの開拓、沿線放置竹林の除伐と景観保全。女性が安心して歩ける散策路。

★歴史と未来の交差点

(世界遺産の普通コンセプトを分かり易い言葉や小道具で表現する)



男山展望台の旧茶屋の有効活用。最低限、簡易トイレの設置は急務の課題。⇒広がり活用次第では、駅前新観光ルートとして設定可能。

⑨男山環境保全条例の制定～男山の緑を乱開発から規制する方法は、今のところ「緑の保全条例」以外になく、罰則規定を伴う条例の制定が必要。

※龍谷大学〇〇ゼミの試み

⑩高良神社の太鼓祭り

市民活動センターは、自由な活動、自主管理・運営がいい

(2)「市民が元気なまちに！」地域再生でまちの資産倍増

「地方の時代」が語られて久しいが、その間用語についても「地方分権」から「地域主権」へとかわり、民主党政権になって“地域”が定着してきたようだ。

すなわち、私たちの地域自治権は本来「お上」や「国」から分け与えられるものではなく、市民個人はもとより住民団体としてもつ「固有の」権限であると理解されるようになったからだと考える。

ところで、この間、国・府などからの税財源移譲とともに、その内容はともかく、権限委譲が一気に進み、逆に地方自治体の悩みの種となっている、という皮肉な現象も生じているようだ。

また、この間の自治体の取り組みの中で、こうした流れを積極的に受け止め対処してきた自治体と、そうでない自治体との間にかかなりの格差が生じているように感じられる。



▲八幡まるごと館の正月用野菜市

今後自治体間・地域間競争がますます激化する中で、このテーマは避けられず、早急な取り組みが求められる。(⇒「八幡未来計画—地域改造計画」八幡未来研究グループ刊 参照)

市は旧東小跡に社会福祉協議会、市民活動センター、ふるさと学習館を何の脈絡も無く詰め込み、「公共施設の有効活用」をはかろうとしている。

●男山団地再生に関する市の取り組みの現状は？

市はこれまで、男山団地再生に関して関係機関への要望や援助の要請について、やれることはやってきた(頼るべきところは頼り、お願いすべきお願いしてきた)。

今、市にとって大きな課題になっているのは、「八幡市を将来、どんなまちにしたいか」「男山をどんな地域にしたいか」—そのグランドデザインを描くことです。「これだけは他人に頼ることはできず、八幡市自身の手でつくりたいと、どうにもならない。自治体なんだから」。関係機関も「これだけは応援するにも、その方法がありません」というほかない。

つまり、今一番の課題は市や男山地域全体の将来構想(=基本構想・基本計画)の早急な策定が求められていて、これ抜きには一歩も進まないところに来ているのが現状です。

「市民活動センター」もそのひとつ。狙いはNPOや種々の自主的なボランティアグループなど市民の自由で自主的な活動を保証しようとするものだ。

このセンターも種々の問題点をはらんでいるが、まずは、実際に活用しながら改善是正していくことにしたい。このセンターは市民にとって限りなく自由で使い勝手がよく、自主管理に近い状態で管理・運営する開かれた施設にした方がいい。

なお、初期の立ち上がりについては、ヒト、モノ、カネの援助が必要。同時に既存の制度の見直しも同時に実施する必要がある。

いま、**地域力が減退**しているといわれるが、これを補完するのがNPOなどの自主的市民団体の活動である。有償無償のボランティアだけでなく、コ

ミュニティビジネスの活用、既存の自治会と自主的市民団体の連携は地域力を再生していくうえで必須要件である。

まちかど博物館、八幡まるごと館活動は 地域再生、人材づくりの貴重な試み

今実施している八幡まるごと館の活動は①地域住人の談話室(おしゃべりサロン)、たまり場②朝採れ地元野菜の直売③趣味、園芸、パソコン教室、着付け教室、英会話など多岐にわたっている。

こうした活動は、いわゆる「新しい公共」という考えに基づいて、民間の力で公的部門の活動分野を担おうとする意欲的試みのひとつだ。

八幡まるごと館のような“地域サロン”は全国的な広がりを見せている。例えば慶応大学のように、地域サロンの運営に大学が全面バックアップしている場合だって少なくない。

社会や地域に貢献している企業もある。こうした“地域サロン”は、今後ますます必要とされるだろうし、増えていくものと思われる。

ただし、自治会など既存のコミュニティ団体とNPOなど民間の自主的グループの連携は、□で言うほど簡単ではない。任意の民間組織は、地域社会ではなかなか認知されにくい面があり、直ちに連携という方向には進みにくい。そこで欠かせないのが行政の役割だ。(市そ



▲④内外からの市民でにぎわうさくら公園
⑤鮮やかに色づいた男山団地の紅葉

のものでなくてもいいが)市という公けの機関がお墨付きを与えることで、市民の信頼度は倍増する。行政の力量が大いに問われるところとなる。

加えて、新しい持続可能な自立した地域づくりをしていくためには、市と常に連携しながらも、一定独立してまちづくりを専門に担う「まちづくりセンター」ともいうべき機関が必要だ。

差しあたっては、NPO としての比較的自由的な立場から、フリーな人材の結集と育成から始めおもに政策研究、まちづくりアドバイザーの派遣、まちづくりを担うリーダーの育成援助などをその内容とする。これについては別途検討を要するが、差し当たりたとえば「八幡まちづくり大学(院)」を開講(政策部)するほかは市内部に蓄積することから手掛けることも一つの方法だ。

<男山地域再生に関する市の取り組み>

*市役所内に男山のまちづくりを推進する専門部署を設置(設置済み)

(だが、過去1年間会合が開かれず、全く機能していない)

*府から「お助けマン」(まちづくり援助隊)が加わり、UR都市再生機構OBも雇用し、スタッフを拡充した。
*関西大学の調査活動への協力

*男山地域再生基本構想と実施計画作り(手つかず⇒今後の課題)

*地域住人を含む協議機関を設け、市民参画で計画推進(市のランドデザインができたのちの話⇒今後の課題)

*H25年予算で「男山地域再生」に関して、京都府に要望書を提出済み

*市は「男山地域の再生は市の将来にとって重要」という認識を持っている

(市営住宅の廃止・見直し～集約化するUR男山賃貸住宅による代替→家賃の差額は補助)

1) 男山地域コミュニティ

<具体的課題>

■男山地域再生

～住み続けたい男山
(⇒詳細は「男山のまち再生八幡市の生き残り戦略レポート」
男山地域再生研究会参照)



▲八幡市にとって最大の難敵・水害対策(木津川河川敷での水防訓練)

<コンセプトおよびキーワード>

*グレードの高い良質な住宅団地～男山のみやびの森に包まれた緑の住宅団地。フォレストタウン男山。

建設当時は「量」がマンパワーを作り出し支配したが、今やコンパクトで落ち着いたゆとりのある、質の高い住環境や住宅団地が求められている。

男山団地開発の経過と現状

●日本住都公団による国策としての団地建設

最初に団地が導入されたところは「国策」として造られた。地方の農村から都市に「集団就職」で押し寄せてくる大量の若い労働者＝「金の卵」の受皿として、大阪・千里や東京・多摩など全国に数か所の大規模ニュータウンが開かれた。男山団地もそのひとつであった。



左瀬死の山桜救出大作戦 侵入した竹林の檻に取り囲まれ、瀬死状態となったヤマザクラの老大木を発見。早速、竹林の除伐によって見事に甦らせた。

居希望者は多く競争が激しくなり、ニュータウンだけでは到底賄えきれず、わずかな人数の選ばれた人しか受け入れることはできなかった。結局、ニュータウンに入るには、年収基準や家族構成など厳しい条件をクリアしたうえで、100倍を上回る抽選もめずらしくはなかった。何年か待ちで幸運にも選ばれ、入居を果たした住人たちは「団地族」と呼ばれ、一種の羨望のまなざしで見られた。緑や空地も多く住宅環境は良好で、まるで「新天地」にいるようだった。また、すぐそこまでやってきている高度成長という時代の要請もあって、ユニットバスの導入など若者が望む最先端の設備や備品類が取り入れられた。その意味で、当時の「団地族」は社会的に選ばれた一種のエリート集団であった。したがって、団地総体としても自ずからレベルが高く、経済的にも文化的にも既存の集落とは異なる、全くの“異文化集団”ともいえる一角が突如姿を現したのである。

また、当時の団地導入が国策だった証拠に、「5省協定」があるが、これは「国の責任」で財源補てんしていこうという姿勢の表れで、これによりわが八幡市もURに対して立て替え払いの返還をいまだに行っていることを見てもわかる(実は「5省協定」は八幡市が提案し全国的に普及したやり方だ)。

ついでながら、大規模団地の導入によって保育園や幼稚園、学校、公園、文化施設、上下水道、ごみ処理など一まちの必要経費は膨大となり、小さなまちの財政はパンクする。これに対抗する措置として考えだされたのが、地方交付税の「人口急増補正」の導入だ。これについても、本市発の制度改革であった。

●老朽化、エレベーターなし…時代の変化に立ち遅れ

その後、団地は時代遅れの老朽化した設備、エレベーターのない中層住宅など生活スタイルの変化に対応しきれず、若者にも高齢者にも魅力のない住宅となってしまった。そうすると、需要と供給の関係でだれでも自由に入れるような単なる安アパートとなり、多くの空き家が生まれるようになった。

●「もはや国に責任はない」一問われる自力更生

さて、今日URから提案されている削減や建て替え対策だが、国の経済事情や時代の要請などが建設当時とまるで異なるなかで、当事者である自治体がよほど気合を入れてかからないと状況に流されてしまうこと必至である。

「もはや国に責任はない」と。男山地域の再生問題は、こうした厳しい現実を前提に事に当たっていかねばならない。だが、先に見たように、実際は全く逆のように見受けられる。当事者としての自治体の気構えも現実の対応も他人に頼ってばかりで、自分で動こうとはしない。全く困ったことだ。

***集中豪雨や地震に弱い樟葉に比べて、より安心安全な高台にある住宅団地⇒比較的規模の大きな「防災公園」の設置**

再生男山団地は「緑に囲まれた
歩いて暮らせるコンパクトなまち」

***歩いて暮らせるコンパクトなまち**

公共施設や買い物、病院、バスなど交通の利便性、エレベーターの設置や高齢者にやさしいユニバーサルデザインの導入などにより、歩いて暮らせるまちに改造

*若者にとって魅力ある団地

- ・子育て環境～保育・幼稚園・学童施設（有）、乳幼児医療（有）、子ども手当（有）、子育て相談・アドバイザー（有）
- ・居住環境～起業や在宅労働、未来を先取りしたハイテク住居、留学生専用住宅。必要あれば家賃補助

*旧四小、五小の有効活用(別途改めて「積極活用検討委員会」を立ち上げ本格的に検討する必要あり)

2) 東部コミュニティ

- * インター周辺用地(農地)の高度利用
複合都市機能拠点としての整備＝L P
- * 都市計画決定の見直し
- * 地元農産物の直売店と地産地消の推進
- * 地元産品を活用した郷土料理の店奨励
- * 学校給食・配食サービスの充実（幼・保・学校教育・福祉サービス）
- * 安全安心な食で食育教育の推進（社会教育・生涯学習）

3) 南部コミュニティ

- * 支所機能を持つ行政機関の設置
- * 基本的な生活基盤（利便施設）・都市基盤の整備
- * 南北交通網の整備
- * 郵便局の設置
- * その他都市基盤の整備
- * 東部・南部・男山の市民統合の推進

(3) 市民協働推進型行政への転換

行政は常に変転する市民の多様なニーズに応えていかねばならない。最小限の行政経費で最大限のサービスが求められる。まさに、**顧客第一主義**であり、予算執行にあたっては**“選択と集中”**である。

世間では“脱官僚”が常識。

ところが、本市の場合は世間とはいささかズレがあって最低限必要不可欠な官僚制さえ整っていないのだ。その最たるものが、**企画政策部門**の存在だ。本来、行政運営にあたっての推進役であり、シンクタンクやけん引車の役割を果たすはずの機関が、ほとんど機能してない。

したがって、行政改革の第一歩は、**その抜本的な見直し**から始まる。

市長以下三役は改革の戦闘司令部をつくり、陣頭指揮にあたらなければならない。

●「職場アジール」はないか、総点検を！

行政の推進役—企画政策部門の飛躍的強化をはかろう！

1) 職員の執行体制の強化

①企画政策部門の抜本的強化

現状では、国の下請け機関として、統計・調査くらいしかできていない。

* 企画推進～～～国や関係機関の動向調査分析、政策の企画立案

* 企画調整～～～市内外の関係機関との調整

* 企画経営～～～市の経営戦略、マネジメント

②外部人材の積極登用

③最近、定年を前にした職員の大量退職が続出、実際の事務執行にまで悪影響を及ぼす勢いにある。職員の健康管理を含めた人事管理の体制を格段に強め、魅力ある職場への転換を目指す(2～3年はかかる?)。

④職員の“やる気”をどう引き出し、行政効率があげられるか。調査研究と原因究明に努め、民間手法も活用しながら執行体制の向上に努める。

⑤特別な事業の執行についてはプロジェクトチームで対応

2) 市民の生命財産を守る災害に強いまち

- * 八幡の歴史は水害との格闘の歴史でもあった。木津川堤防を早急に改修し、水防対策を充実強化する
- * 高速・救急・広域医療体制の確立(IJ 対応)
インタージャンクション周辺のまちづくりを活用した「関西全体を視野に入れた広域対応・救急医療・ドクターヘリの飛行」などを積極的に導入する
- * 広域体制と連動した地域救急医療体制の充実
- * 公共施設、個人住宅の耐震診断と災害対応の強化
- * 消防・救急職員の若返りと拡充、機器の充実と訓練強化
- * 地域自主防災、備蓄、実践型訓練体制の充実
- * 原発含む防災・避難訓練計画の見直し
- * 救急派遣と相互応援体制の確立
- * 防災公園一防災拠点づくりと日常訓練の実施

3) 自主財源の確保

- * 最大の自主財源は男山地域再生に伴う資産価値の増大
- * 用途地域の変更に伴う資産価値の増大
- * “新しいふるさとづくり” ほかあらゆる機会をとらえて、“ふるさと納税者” や「まちづくりファンド」などへの協力を要請

4) 議会改革

- * 改革特別委員会の取り組みに注目

<参考資料一男山地域の再生>

1. 開発の経緯

《男山地域の動き》		《社会の動き》	
S352	八幡市臨時議会 工場等誘致条例の制定	S 35.12	国民所得増進計画の決定(池田内閣)
S356	工場等誘致審議会 公団住宅の誘致を橋本～美濃山地区の86万坪を予定		
S376	八幡市政だより 長い間八幡は変わらなかったが、男山丘陵は著しく変容しており、今後さらに変化は激しくなるだろう。	S37	新産業都市建設促進法の施行
		S 37.12	公団は八幡町を住宅開発事業施行区域に決定
S38	八幡町の一般会計予算1億4,200万円のうち33%を建設事業に充当	S38.2	公団は開発計画の概要を内示(計画面積 56万坪)
S 38.12	農地転用の不同意(議会)	S39.4	公団から八幡町に文書送付 ・農地転用が不可能であれば住宅開発は中止 ・住宅誘致は八幡町が熱心である ・開発の断念もあり得る
		S39	京都府総合開発計画の方針決定 八幡町から田辺町の西部丘陵地帯を住宅開発に造成する。
S40.2	臨時町議会 開発促進を議決 費収価格 平均4,800円/坪を決定	S40.4	近畿圏整備法の近郊整備区域に指定
S41.4	現地測量の開始		
S44.5	団地名を男山団地に決定		
S 44.11	団地の南部から造成工事に着手		
S46	団地入居の開始		

<参考資料—UR 団地の集約化>

独立行政法人整理合理化計画（平成19年12月24日）

●平成19年12月～団地の集約化による新たなまちづくりを予定（平成30年度までに事業着手予定）

- 集約化に伴って生じる整備敷地は公的利用を優先し、まちづくりに活用
- 維持管理住宅は、計画的修繕等の実施
- 高齢者等に適した住宅の供給
- 事業実施にあたっては、居住者の生活に配慮
- 事業着手前に一般募集を停止し、活用可能な空家住宅は定期借家として募集

《男山団地の概況》

- 賃貸住宅 4,603戸
- 分譲住宅 1,350戸
- 人口 22,800人
(八幡市全体の1/3に相当)
- 高齢化率 17.29%

計画 区域面積 185.6ha

人口 32,000人
戸数 9,000戸

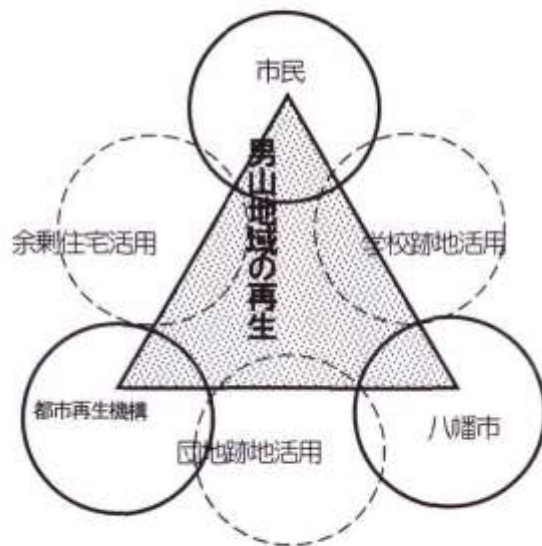
集約型団地

団地の一部住棟を削除し、規模を縮小

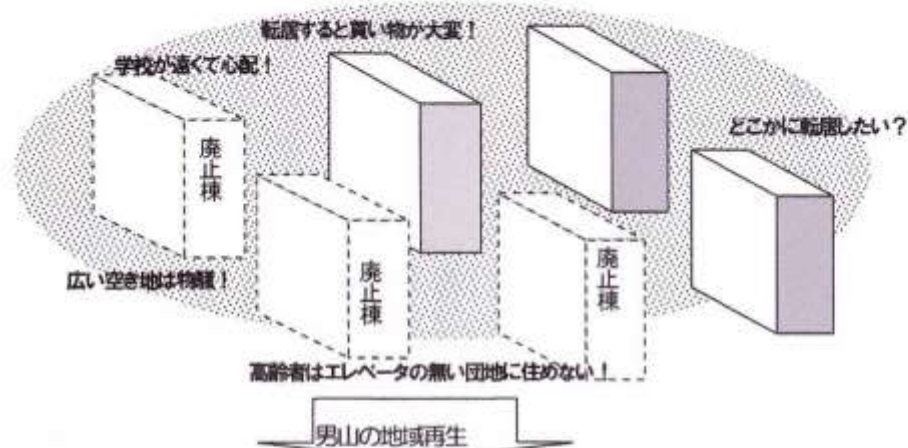
《用途地域》

- 第1種中高層住宅専用地域 ●建ぺい率 60%
- 容積率 200%
- 第二種高度地区 ●高さ制限 15m

男山地域の再生は、「市民、都市再生機構、八幡市」が連携し、それぞれの役割を果たすことが重要と考えます。



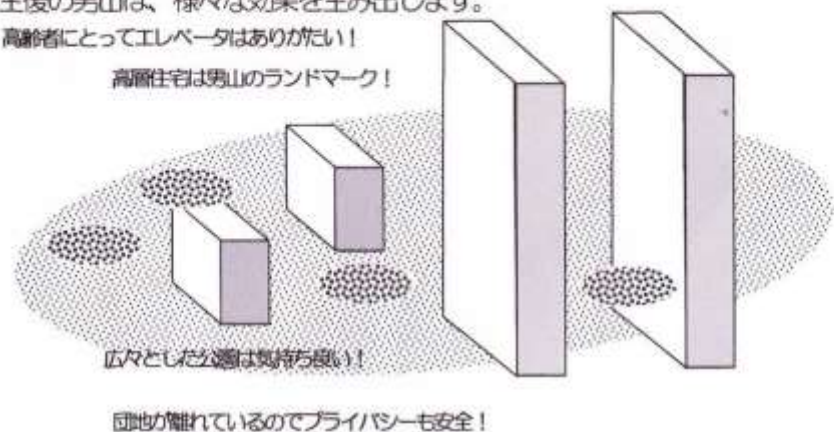
<参考資料—団地集約化の影響>



再生後の男山は、様々な効果を生み出します。

高齢者にとってエレベータはありがたい!

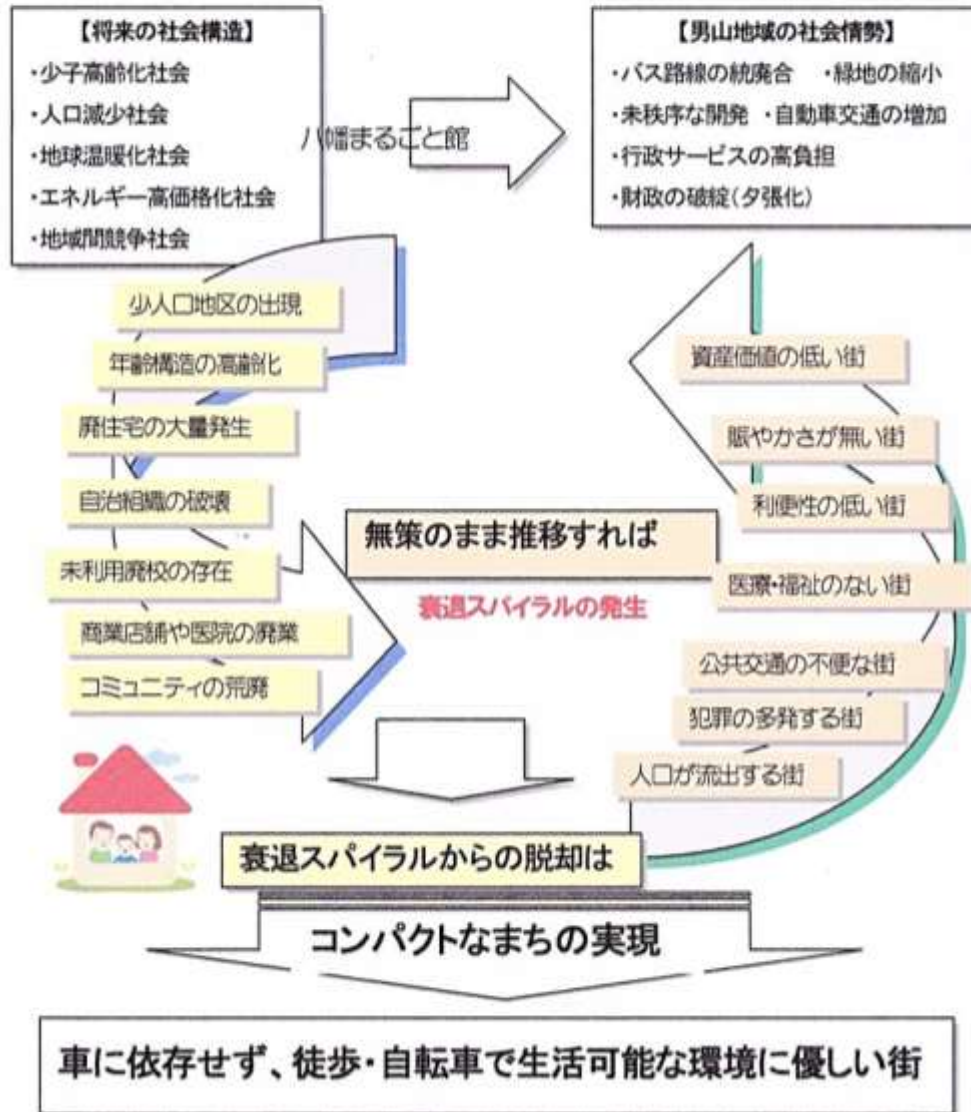
高層住宅は男山のランドマーク!



快適な暮らし → 住民の定着化 → 市財政の安定化 → 市民サービス向上

<参考資料—男山地域の将来予測とまちづくりの基本的考え方>

確実に出現する社会構造(男山地域を取り巻く環境)



●上谷耕造 (うえたに・こうそう) のプロフィール

- *1949年 香川県小豆島生まれ
- *1972年 立命館大学法学部卒業
- *1972年 八幡市役所勤務 おもに財務、広報を担当
- *1982年 退職 その後上京、出版関係に従事しながら福祉ボランティアやPTA活動などに携わる。
- *1991年 八幡市議会議員に初当選以降、連続4回当選 副議長・議長を歴任
- *2004年 八幡市長選挙に出馬、落選。「浪人時代」はNPO法人八幡だけくらすの活動に参加、同あつたかサポート(京都市)設立に参画。日本エコミュージアム研究会会員。
- *2007年 八幡市議会議員に復帰(通算5期)
- *2008年 「市民が元気なまちに！」VOL.1発行
- *2009年 地域サロン「八幡まるごと館」オープン
- *2010年 「市民が元気なまちに！」VOL.2発行
- *2010年 「古からの贈り物—東高野街道 歴史ロマン」発行
- *2011年 市議第2期選挙当選(通算6期)
- *2012年 「市民が元気なまちに！」VOL.3発行、改訂1号
- *ほかに企画協力=「男山地域のまち再生 八幡市の生き残り戦略レポート」(男山地域再生研究会・浜田保刊(2010年6月))、「八幡未来計画」(八幡未来研究G・浜田保刊2012年6月)
- *毎議会ごとに、市議会 REPORT「こんにちは! 上谷耕造です」を定期発行。また、会派として「みどりの薫風」を年2回発行している。
- *議員報酬のお手盛りアップに反対、今も約100万円超法務省に供託

- 現住所 八幡市男山松里12-20
- 電話 (自宅) 075-983-3091
- 事務所 八幡市男山松里12-20 電話075-983-3664
- 八幡まるごと館のおもな催し(毎週火曜日は休館)
 - *地元農家による地域の新鮮野菜、花木、果物、漬物の直売(低農薬・安価・朝採り・生産者の顔が見える—が基本)
 - *地域の人や道行く人たちが自由に立ち寄り、おしゃべりできるサロン
 - *パッチワーク、着付け教室、絵手紙、正月用しめ飾り、布ぞうり・みそ・ぬか床づくり。また、パソコンや子どもの英会話教室のほか、各種会議用の貸館としても利用されています。
 - *このほか、春と秋の年2回大規模な「まるごと市」を開催、多くのフリーマーケットや野菜市、飲食物などが並び、にぎわいます。

★表紙のことは・



⑤モノから心の時代へ 市内善法律寺で見つかったつくばい。「口」を真ん中に、上から右回りに「吾唯知足」(「われ、ただたるをしる」と読む。同種の蹲踞(手水鉢)は徳川光圀公(水戸黄門)が京都の禅宗龍安寺に寄進したものの(=世界遺産)が有名。

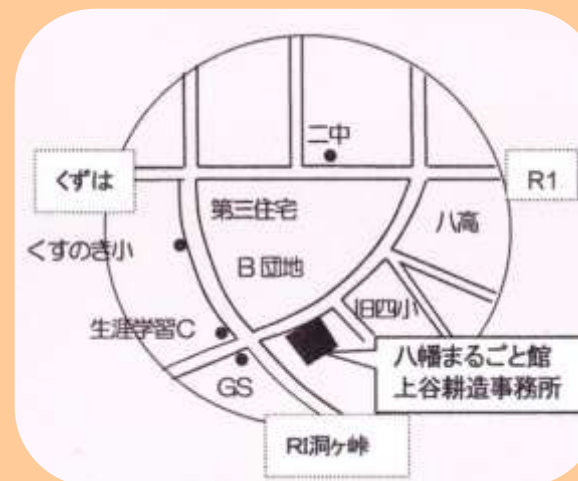
現代社会の物質万能主義、飽くなき大量生産・大量消費によるモノ中心の使い捨て文化を戒め、「がまん」する心の文化の大切さを提唱。3・11 東北大震災以降、「成長指標」として「経済」からブータン王国が採用している「幸福度」(心の満足度)への転換の関心が高まった。

⑥淀川を行き交う帆船 山崎方面から橋本・男山辺りを眺む。当時の男山は一面松林で覆われていた(「淀川両岸一覽」)1861 年刊)

- 冊子名 「市民が元気なまちに！」VO,3
- 発行者 八幡市議会議員上谷耕造
- 発行日 2012 年 10 月
- 連絡先 上谷耕造事務所
(住所) 八幡市男山松里 12-20
(TEL&FAX) 075-983-3664

●E-mail/uetanikozo@zeus.eonet.ne.jp

●URL/<http://www.uetanikozo.com/local>



＜編集後記＞

福祉・教育問題については、あえて取り上げなかった。日中問題、対アジア問題は表面上は法治主義、西欧型理性主義(形而上学)、深層面では人治主義、準理性主義(形而下学)一の2重外交が不可欠ではないか。

ところが、民主党は理性主義的対応で“面子がつぶされた”で終始したのが、行き詰まりの原因ではないか。

いずれにしても、今日は防戦一方にあるが、むしろ日本は対外的に積極外交していく武器が必要。例えば“神仏習合”“緑の外交”ほか。